

英語習得過程における日本語音声の影響

藤田 玲子

L1 Transfer in Japanese Students' English Pronunciation and Its Influence on Other Language Skills

Reiko FUJITA

Abstract

The current paper examines L1 phonological transfer observed in Japanese students' English pronunciation. Firstly, persistence of excessive dependency on L1 phonology is revealed. Secondly, the cause for excessive dependency is attributed to the use of *katakana* as reading aid for English study. Many dictionaries and reference books for beginning level students introduce English sounds by means of *katakana*. Students are likely to get accustomed to substituting English sounds for *kanakana*. The prolonged L1 transfer can have negative effects on other language skills such as listening and reading. Several researches to support the idea are introduced. Finally, suggestions for improving pronunciation instruction for Japanese students are discussed.

はじめに

第2言語習得(SLA)の過程では、母国語(L1)が習得に影響を及ぼすことがあるが、その範囲は広く、語彙、統語、談話なども含むあらゆる言語構造レベルにおいて観察される。母語の転移(transfer)と呼ばれるこの現象は、音声の習得の際にも日常的に学習者の中間言語(interlanguage)の中に入り込んでいる。日本人学習者の場合、日本語にない英語の音を日本語の似た音で代用することが観察される。例えば、rやlの音は日本人にとって困難な音であり、これらを日本語のラ行の音で代用する学習者は多い。Major(1999)の実験によれば、このような母国語の音韻の転移は学習初期には高頻度でみられるが、学習と訓練により、減少の一途をたどるといふ。日本人の英語学習者の音声習得の場合も、学習期間を経ることにより同様に母語の転移が減少し、目標言語の音声に近づいているだろうか。実際は、中学、高校と6年間英語を学んだ平均的的大学生や成人の英語発音レベルは一般的に目標言語に近いとはいいがたい。

本論文では日本人の英語音声習得の過程に入り込んでくる日本語音声の影響、すなわち音声レベルでの母語転移を様々な角度から考察する。具体的には、1) 日本人の英語学習者が母語である日本語の音韻体系に過度に頼る傾向にあること、2) そしてその依存が発音表記手段であるカタカナやローマ字の使用により助長されていること、さらに3) そのような音声の影響がリスニングやリーディングをはじめとする英語のスキル習得に弊害を与えていることを論証し、日本人の英語力の低さとの関連を考察、最後に4) その解決策を模索する。

1. 日本人学習者の発音傾向

最初に、日本語と英語の各音声の特徴を比較し、その違いを明確にしなが、日本人学習者の英語習得過程における音声レベルでの母語転移が、日常的に観察される現状を明らかにする。

日本語音声と英語音声の決定的な違いは母音の数である。窪園 (1997: P12) によるとミニマルペアや相補分布の原理によって抽出した日本語の母音音素は a/i/u/e/o の5個であるが、英語には20個の母音音素が存在し、3重母音を加えるとそれ以上の数になる。子音音素については日本語は15個、英語は24個の抽出が可能である。それでは、日本語にある音素がすべて英語の音素で網羅されているかということ、そういうわけではなく、両言語のほとんど全ての子音、母音は多かれ少なかれの違いがある。竹蓋 (1984: p 36) によれば p, b, t, d, k, g など両語で同じ記号を用い同じ発音になると予測されがちな音にも、その音素には違いが認められるという。

このように日本人にとって英語は未知の音素が非常に多い言語なので、これら音素を識別すること又は発音することは非常に大変な作業であるといえる。この作業を容易にするため日本人学習者は英語の音を日本語の音で代用して使用することを高頻度で行う。筆者が教室の中で観察した代表的な例を幾つか列挙しよう。

1. 英語の a 系の母音を日本語の「あ」で代用。例えば first も fast も「ふぁーすと」、pun も pan も「ぱん」と発音する。
2. th を「す」や「ず」で代用。three は「すりー」、that は「ざっと」、bath は「ばす」など。
3. v を「ば」行で代用。love, 「らぶ」、violin 「ばいおりん」など。

更に日本語は5個の母音を基盤とした開音節が圧倒的に多い開音節性の高い言語であり、英語は逆に閉音節が多い言語である (窪園 1997)。日本人は開音節に慣れて親しんでいるために英語の単語を発音する際、尾子音や子音が連続する場所のあとに母音を挿入して閉音節を開音節に変えるという作業を無意識のうちに行うことが多い。

1. apple の子音の連続部分は「あっぷる」のように「appuru(lu)」となる。
2. doctor の子音の連続部分は「dokutaa」となる。
3. 文章では、I must go to the post office tomorrow. であれば、I musto go to the posto offisu tomorrow. のような発音を行う。

以上のような例が代表的なものとして観察される。

またプロソディー (リズム、強弱、長さ、ピッチ) に関しても、大きな違いが見られる。特に

英語では、アクセントのある音がアクセントのない音に及ぼす音質変化や、強弱による音節の長さや音質の変化が見られるが、日本語ではアクセントや強弱がその音質に大きな変化を与えることはない。したがって、これらの変化を伴う英語の文章を発音する際には日本語的な一本調子になり、さらにリズムやアクセントが無視されがちであることも観察された。

両語の違いが大きいため、日本人学習者にとっては英語音声の特徴を把握しそれを自分の中間言語に取り入れていくことはかなり困難を伴うことであると推察される。それ故、学習者は初めは、母語である日本語の音韻に頼り無意識のうちに代用や置き換えをしながら英語音声を捉えていく。しかしながら、これらの発音特徴が見られたのは、決して初心の学習者ではない。少なくとも学校教育の中で6年間は英語を学習してきた大学生のものである。冒頭でも言及したが、初期の学習者が母語の音韻体系に頼ることは第2外国語習得の過程では特徴的なことである。しかし、このような日本人学習者の音声習得の傾向を見ると、過渡的な局面であるはずの母語の転移が、非常に長期的となっており、なかなか目標言語の音声に近づいていないことが判る。どうして日本人学習者の多くが長期にわたる学習期間を経てもスムーズに英語の音韻体系を取り込むことができないのであろうか。

この原因として、いくつかのことが推察される。ひとつに、学習者にとって英語音声を習得することは学習目的になっていないということがある。日本の学習環境下(EFL-English as a foreign language)において、実際に英語を母国語とする人との関わりがあまりない中では、試験などのための学習が中心となり、特に音声面での向上は意識されないのかもしれない。筆者の担当クラスにおいて行ったアンケート調査では以下のような結果が出た。

<アンケート1> 大学1年 学生46名対象 (1999年実施)

Q1. 発音を良くしようと努力している、または努力をしていた時期が：

ある	13名	28%
ない	27名	59%
どちらとも言えない	6名	13%

この結果から見ると半分以上の学生が発音向上に興味を示していないことがわかる。

Q2. 「無いと答えた人に聞きます。その理由は何ですか。」(記入式回答)

- ・必要性を感じていない(特に必要を感じない/通じれば良いなど) 35%、
- ・ある程度興味はあるがその機会が無かった(機会があればやりたいが機会が無かった/何をすれば良いか判らないなど) 23%、
- ・苦手、不得意などの理由によるもの。(英語は嫌い、読めないなど) 13%、
- ・その他の回答・わからない・無記入 29%

必要性を感じないという回答が多く見られ、学習目的となっていない傾向がみられることが示された。

Selinker (Ellis 1985:p48) は学習者が自分の中間言語をこれ以上伸ばす必要性が無いと考えたときに化石化 (fossilization) という現象が起こると指摘しているが、日本人の場合、音声に関してこのような化石化が起こり、日本語の影響が顕著な英語発音となっていると考えることが

できる。

二つめの原因として、日本語化している英語が定着しているということがある。つまり、日本語の影響が顕著な英語発音が、目標言語の英語の発音とそれほどかけはなれていないと学習者が理解している場合がある。これは、実際に使用する機会を持ってみて、通じなかったという苦い経験をしないとなかなか理解に至らない。しかし、McDonald を「マクドナルド」と発音して全く通じなかった、Do you know that girl? を「ガール」と発音してぜんぜんわかってもらえなかった、I'm going to take a bath. を「バス」と発音したため「この夜遅くにどこへ出かけるのか」とげげんな顔をされたなどという例を海外研修に参加した学生から聞いた。このような例をみると、外来語として日本語に入り込み、カタカナで表記されたものが多いことが判る。したがって、カタカナによる外来語表記が学習過程に入り込み、カタカナ的な音の定着を助長していると仮定できるのではないか。本稿ではさらにこの発音表記と日本人の発音習得との関連性及び問題点を探求する。

2. 発音表記と問題点

1) カタカナの振り

発音を読む一助として使用されるのが発音表記であるが、日本の教科書、また辞書や参考書の中では一般的に IPA (発音記号) が使用されている。発音記号は母音表、子音表の中で音を捉え表記した非常に優れた表記法であるが、実際にこれが活用されているかというところでもないようである。筆者の担当クラスで行った調査では以下の結果が出た。

<アンケート 2> 大学2年生 62人対象 (1999年実施)

Q1. 発音記号を：

ひとつお習ったことがある	11%
部分的に習ったことがある	32%
習ったことはない	57%

Q2. 発音記号を：

問題無く読める	0%
まあまあ読める	10%
少しなら読める	55%
読めない	35%

ここに示されるよう学校教育の中では、発音記号の体系的な指導はあまり行われておらず、指導するにしても、読みにくいものなどを部分的に教えるという方法が主流のようである。全体的には、まあまあ読めるという者がわずかに10%、あとは殆ど読めないという現状であるから、いかに発音記号が定着していないかが明らかである。確かに発音記号は種類が多く、学ぶにも音と照合しないと学びにくいということもあり、あまり学習者の間に浸透していかないようである。

これに対して、発音記号と並べてカタカナで読み方を併記した辞書・参考書も非常に多い。特に初心者向けのものは、ほぼ全てにカタカナ表記があると言っても過言ではない。結局、発音記

号に取って代わっているのがカタカナ振りということになるようである。歴史的には、カタカナと英語の関係はカタカナが外来語表記法として使用されたことに始まる。外国語が入ってきた初期の時代には耳で聞いてそれを表記するということが主流であったが、書物などが入り出すと今度はスペルを見て表記することが一般的になった(加藤 1994)。そして様々な外来語が日本語の中に、スペルから判読して日本語音声化された形、すなわちもとの音とはかけ離れた言葉として入ってくるようになった。

さらに、カタカナ振りと密接に関わっているのがローマ字である。ローマ字は本来日本語の46音をアルファベットで表現したものであるが、英語を学習する前に導入され、ローマ字が読めることで英語学習にも一助となるという風に考える人が多い。勿論hは「はひふへほ」の音を示すとか、kは「かきくけこ」の音であるといった大まかな英語音の紹介という面では役に立つことはあるだろうが、基本的にローマ字はローマ字で英語とは違う。しかし日常生活の中で学習者は英語の映画タイトルや俳優名、アーティスト名がローマ字読みとなりそれがカタカナとして表現されているものにさらされている。そして多くの学習者はローマ字と英語を結びつけ、英語のスペルをローマ字のルールに従って読めば英語になると誤解しているようである。英語は音とスペルが日本語のように1対1対応でないため、発音するためには読むルールの知識が必要であるが、読むルールを学習していない学習者は未知の単語が出てくるとローマ字の読み方に従いながら読みまざるを得ない。そして、それをカタカナで表記し直してそのまま覚えてしまうことが、学習者によってはひとつの学習パターンとなっているのである。

このように外国語を表現することがカタカナの役割ということがあり、初期の学習者は英語の読みに際してカタカナと英語を結びつけることを抵抗なく行っている。このようにカナやローマ字を利用して読む英語を、あたかも正確な発音を学習しているように思わせるのが初心者向けの辞書や参考書に見られるカタカナの振りである。学習者は辞書や参考書に表記されていればそれが正しいと考え、そのまま読めば英語になると考える場合が多いであろう。しかし、これらの辞書、参考書を調査していくと、使用されているカナ振りが決して適切であるとは言えないものが多い。以下にカナ表記の使用状況について報告する。

2) カナ振りの使用状況の調査

調査を行ったのは中学生向けの辞書5冊、中学1年生の家庭用学習参考書3冊である。全てがカタカナと発音記号を併記した発音表記を使用していた。辞書5冊に関しては、表記に関して表紙や裏表紙の中に「カタカナは本来の音ではないので早く発音記号を覚えよう。」「カタカナの音は英語の音を表しきれないので先生の発音を良く聞こう。」と言った趣旨の注意書きがあるが、目立つように書かれているわけではなく、見逃してしまう学習者も多いと予想される。学習者が辞書で調べたときどのような発音が出てくるか、3冊の辞書と1冊の学習参考書の中から例を幾つか列挙する。

girl	1. ガ〜る	2. ガール	3. ガール	4. ガ〜ル
apple	1. アプる	2. あプル	3. アプる	4. アプル
first	1. ふア〜スト	2. ファースト	3. ファ〜スト	4. ファ〜スト
fast	1. ふあスト	2. ファスト	3. ファースト	4. ファスト
early	1. ア〜リィ	2. ア〜リ	3. ア〜リ	4. ア〜リィ

(1. サンライズ 中学1年英語参考書 旺文社 2. New Horizon 英和辞典 東京書籍 3. 初級クラウン 英和辞典 三省堂 4. ジュニアアンカー 英和辞典 学習研究社)

各辞書により、〔～〕や〔－〕の使用またはひらがな・カタカナでの区別により、なるだけ近い音を表現するような努力が見られるが、統一性が無いために学習者にはわかりにくい。またその発音ルールを学ぶことは自学自習の中では容易ではない。「ア～」が〔ɑr:〕の音を表すというルールが前置きに書かれていても、「ア～」と記述してあればつい日本語の「ア～」の音と錯覚してしまいがちである。

このような表記を利用して学習する問題点をまとめると、1) カタカナは似た音を示すが、必ずしも本来の音を表さないことを理解するような説明、指導の無いままに学習されがちであること。2) 各出版物の中で、それぞれが本来の音に近づける工夫をしているが、全体的な統一性が無いこと、などがあげられよう。この結果、生じるであろうと推測されるのは、1) 学習者がカナで表された音をコミュニケーションの中で使用することに抵抗が無くなること、2) それが英語の本来の音に慣れるまでの暫定的なものであるとは考えない可能性が高いこと、3) 従って長期にわたってこれらを使用する傾向にあること、などである。

間違いを認知するという事は学習過程には必要である。自分の間違いを自分でまたは他人の指摘により認知することで、目標言語へ近づけることができるのである。日本人学習者の場合、カタカナ振りの影響により、音声の間違いに対する認知程度が低いといえるのではないだろうか。その結果、学習者の中間言語はかなりの学習期間を経ても目標言語の音声に近づける努力が行われないうと推察される。大学の教育現場でも、多くの学習者が当然のように日本語の音声の影響を強く受けたカタカナ的発音を行っていることは関係者であれば良く知るところである。以上に、日本人がカナやローマ字の影響により長期的に母語の音韻に頼る傾向にあることを考察してきた。それでは以下にそれがなぜ問題であるのかを論証していく。

3. 母語音声への依存とその弊害

1) どんな発音を指導するか

まず、発音指導を考慮する際に、どんな発音を教えるべきか、または学ぶべきかという問題は重要である。日本人なのだから、カナやローマ字の音声に頼った発音でもよいという議論もあるだろう。Jenkins (1998) は英語をEIL (English as an International Language) と表現して、欧米の英語を母語とする人々というより、母語としない人々とコミュニケーションするための共通語としての英語の役割が、これからは大きくなると述べている。従って英語のネイティブスピーカーの発音に近づこうとするよりは、母語の音韻体系を捨て去ることなく、核となる部分のみ矯正を行うような指導を行うことを提案している。このような考え方がこれから主流になると筆者も考えるし、日本人であるからには日本語的な発音でも、相手とコミュニケーションをはかることができれば基本的には問題はない。しかしながら、日本の英語教育の中では日本語の影響が過度で、さらにそれを学習者も教師も意識していない傾向があるように見受けられる。そしてこの影響が日本人の英語習得全体に大きな弊害をもたらしているのではないかと筆者は考える。以下に、その弊害についてさらに具体的に考察を進める。

2) 日本人の英語力

日本人の英語力は世界的に見ても決して高いと言えない。TOEFL の1996-97年度の結果では、日本人のスコアはアジア26カ国中24位(496点)という惨憺たる結果である。参考までに25位はタイ、26位はモンゴルである。他の主要国のスコアを挙げると、中国 555点、シンガポール 597点、韓国 518点、台湾 507点、フランス 556点、オーストリア 596点、メキシコ 547点、ブラジル 551点となっている(ETS 1997-98 Edition)。世界的には、教育レベルが高いはずの日本人の英語力が、実は低いことがよくわかる。その原因として、さまざまなことがいわれている。受験学習中心の教育、義務教育の中での時間数不足、文法・訳読中心の授業内容、クラス規模の問題などである。これらは外的要因で、各国にも各々の教育制度の中での制約や利点があり、それらがその国の学習者の英語力に大きく影響している。しかし、外的要因のみが個人の英語力を決定するわけではない。学習者が学ぶプロセスに何か問題があり、それが英語力を左右する要因のひとつとなっている場合もあるだろう。

学習者が外国語である英語を学習するプロセスの中で避けて通れないのが、アルファベットを覚えること、その組み合わせによる語彙の音韻と意味を習得してくこと、さらには文構造とそれに関わるルールを学んでいくことなどである。これらの基礎を組み立てていく中で、話す、聞く、読む、書くなどの4つの技能が機能しだすのである。この基礎が部分的に欠落していれば、4技能が上手く機能しないことが推察できる。日本人の場合、母語の音声体系に過度に頼ることが、4技能、特にリスニング、リーディングなどに影響を与えていることはないだろうか。発音というと、ややもするとスピーキングとの関連だけが取り沙汰されがちであるが、実際には発音と他の技能との関連は大きいと思われ、以下にその関連性について論証する。

3) リスニングへの弊害

まず、英語音声を日本語の音声でとらえて覚えることがリスニングにもたらす弊害として、カタカナ、ローマ字の音でインプットされた英語と、本来の音とが合致しないということがある。リスニングの過程には音素識別、保持、内容理解という流れがあるが(垣田:p4)、音素識別の段階で音素を識別しても、自分の中で整理し記憶した音素と異なるため、内容理解というプロセスまで至らないのである。カナで覚えた英語はリスニングに際してもそのように聞こえることを期待してしまうために本来の音を聞いても理解できないわけである。単純な英語の単語や文章を聞いてもわからないが、書いてある答えを見れば非常に簡単で熟知しているものであったりすることは多くの日本人学習者が経験していることである。

以下に、筆者の行なった簡単な単語のリスニングテストの結果を報告する。出題したのはカタカナで通常使用されていて、カタカナによる音の影響を受けているであろうと予測される単語である。

<リスニングテスト> (1998年実施)

方法：日本語の中にも定着し既習の簡単な5つの単語(1.girl 2.office 3.bath 4.doctor 5.swimming)をネイティブ・スピーカーに発音してもらい、その録音テープを教室で流す。テープは1回、単語はそれぞれ1回ずつだけ読まれる。学生はそれを英語または日本語訳で書き出す。被験者は公立中学1~3年生198人である。回答は英語または日本語訳が正解であれば1得点とする。満点は5点である。

<得点表>

得点	5点	4点	3点	2点	1点	0点
人数(198人)	6	24	48	51	39	30

既習の単語であるにもかかわらず全体的にスコアが低いのは、カタカナの音と実際の発音のギャップがあったためと考えられる。

さらに、テストには「あなたは英語を読んだり、発音を記録したりするときカタカナを利用するほうですか。」という質問を付けた。答えは はい。いいえ。の2通りとした。

2通りの答えに従い、カナ利用する者、しない者の2グループに分け、点数の違いを比較した。カナ利用は71名、利用しないは127名、計198名が対象となった。

<カナ利用する者・しない者別得点表>

得点	5点	4点	3点	2点	1点	0点
利用する(71人)	1	9	15	22	11	13
利用しない(127人)	5	15	33	29	28	17

平均点はカナ利用者は 1.9 点、利用しない者は 2.1 点であった。利用しない者のほうが平均値が高い結果となった。利用しないと断言しても辞書や参考書には日常的に出てくるわけで、全く利用しないとは言いきれないであろうが、なるだけ利用していないという態度は正しい音声を捉えることに一役買っているといえよう。

渡部 (1979) も日本人の英語のリスニング力について分析を行ない、日本人学習者のリスニングは音声上の能力が大きく欠如していることを示唆している。リスニングの領域として、音声上の能力、語彙力、文法能力、背景知識に分類、更に音声上の能力には音素識別やプロソディーの要素をあげているが、日本語の音声を介した英語の知識により音素識別が阻まれ、また文章においてはそのプロソディーが狂うことがリスニングの弱さの原因であるとしている。

竹蓋 (1988:p5) も日本人学生の音知覚行動が日本語からの干渉により大きなハンディを負っており、在米の各国留学生と比較しても日本人高校生はリスニング力が著しく劣っていることを指摘している。その理由として、学習者が母語干渉により、意識しないままに母語の音響特質を目的言語に当てはめてしまうと分析している。

このように、母語の干渉を大きく受けた中間言語をベースにして英語をとらえることが日本人のリスニングの弱さの原因のひとつであることは疑いないといえよう。

4) リーディングへの弊害

次にリーディング力について考察をしてみる。音声というとコミュニケーション能力、すなわちリスニングやスピーキングとの関連だけを考慮しがちであるが、音声はリーディングにも少なからずの影響を与えられられる。よく日本人は話すのは苦手でも読むことは得意だということを知ることが、竹蓋 (1982 : p195) は種々のテスト結果の分析から、日本人の英語学力は読みの力を含めて極めて低いことを指摘している。現実にTOEFLの1996-97年における日本人の Reading Comprehension 部分のスコアでは、アジア26カ国中、朝鮮民主主義人民共和国と並

んで24番目という惨憺たるものであった (ETS 1997-98 Edition)。話せないが読めるというのは全くの神話であると言える。この原因は複合的なものであろうが、ここでは音声との関連から考察をすすめる。

最初に、リーディングのプロセスに関してはここ20年近く様々な研究が行われ、明らかになってきたことが多い。その中のひとつに、個々の単語の認識力 (word recognition) がリーディングの過程に重要な役割を持つということがある。特にリーディングを習い始めの段階では単語レベルでの操作がスムーズであることが上手な読み手になる条件とも言える。文字を見て脱コード化 (decoding) するプロセスがうまくできない子供はその後読解のための基盤をなかなか築くことができない (Durgunoglu, Nagay & Hancin-Bhatt, 1993)。子供の脱コード化のプロセスと深くかかわってくるのが音韻識別力 (phonological awareness) である。音韻識別力とは頭韻や脚韻と聞き分け音素の混合や分離の能力のことであるが、リーディングとの相関関係については数多くの研究が行われており、音韻識別力の高い子供はリーディングも得意であることが実証されている (Caravolas & Bruck, 1993)。また数多くの実験により、音韻識別のトレーニングを受けた子供達がリーディング力を向上させた事が報告されている。しかしながら、どうしてこのような相関関係が生じるのかについてはまだはっきりしない部分が多く、その解明のために様々な角度から更なる研究が進められている段階である。これらはあくまでも第1言語に関する研究であるが、最近では第2言語との関連でもいくつかの研究結果が出てきている。英語を第2外国語とする日本人の児童に関して玉井 (1999) が音の認識力の実験を行っている。そして、音の認識力とスペリングの認識力に高い相関関係があったことを報告している。

第2外国語として英語を読む場合には、母国語を読む場合とまったく同じモデルが当てはまるわけではないので、実験のアプローチも変わり、今後のさらなる研究成果が待たれるところである。しかし、読むというプロセスの中に文字 (記号) を音として視覚的に認知することは必須と考えられ、読むという作業をする場合に、音を正確に把握していないことはそのプロセスに遅延や弊害をもたらすと予測できる。したがって、音とリーディングの関係が非常に密接なものであることは否定する余地が無く、正しい音やプロソディーの学習不足が、日本人英語学習者のリーディング力の弱さの要因となっているのではないかと推察できる。

ここではリスニングとリーディングに特に焦点を当て、音声 that 英語習得に与える影響を考察してきたが、英語力とはスピーキング、ライティング、語彙力、文法知識なども含むあらゆる総合的な能力の集大成である。これらのスキルが相互にからみあって目標言語に近づいていくのであり、どこかに弊害があれば全てがその影響を受けることは言うまでもない。

4. 教育現場における改革の必要性

英語と日本語の音声に大きな違いがあるため、学習者は困難を感じ、結果的に日本語の音韻体系に頼り、カナやローマ字を利用して英語を学習していくわけである。しかしカナやローマ字を使用して学習することは、決して英語学習に良い影響を与えないことは前述のとおりである。それ故、カナやローマ字に惑わされることなく、英語の音声を初期の段階で体系的に学ぶことは、日本人の英語力向上の重要な要素として認識されねばならない。

しかしながら、実際の教育現場において英語の音声教育が全くと言っていいほどないがしろにされている現状は、前述のアンケートの結果にも示されていた。初歩の学習者にとって英語の音

声が未知なものであることに加え、英語の単語を見てその読み方を判断することは大変困難なことである。未知の単語を読もうとする日本人学習者が、テープや教師の発音をそのまま耳で覚えられればよいが、覚えきれない場合は、必然的にカタカナでカナを振ったり、自分の知っているローマ字の知識で適当に読んだりということになるわけである。

このような音声知識の不足により、読み方がわからない→ローマ字読みで読む、カナを振る→間違っ
て覚える→聞けない、話せない、読めない→英語苦手意識→英語力向上意欲低下→中間言語の化石化という構図ができあがる。この悪循環を断ち切るためには、英語導入時における音声教育の徹底が必要であると筆者は考える。英語を母国語にするものでさえ、スペルと音の関係を学んで読めるようになるには、かなりの時間がかかる。多くのアメリカの小学校ではフォニックスを使用して、スペルから音を判読して読む練習が行われる。日本人学習者は逆にスペルを習ってさあ読め、といわれるわけであるが、スペルと音の何らかの系統だった相関関係を知らねば、これは困難を極めるはずである。スペルを導入した段階で知らねばならないのはその音の出し方である。長谷川(1997)の指摘するように日本の英語教育にとって、音声教育が大きな欠落箇所であるといえよう。

5. 音声教育への提言

今まで考察を行ったように、音声は英語習得に及ぼす影響力を考慮すれば、発音記号やフォニックスなど何らかのシステムを利用して、初期の段階で効果的な英語の音声トレーニングを行い、正しい音とプロソディーを教えることが必要であるのは自明であろう。

これからの発音教育改善の第1ステップは、まず音声習得の重要性に対する認識と母国語の音声に頼らないという意識を学習者・教育者とも持つことである。学習者にも学習目的として発音の重要性を認識させ、内的な動機付けを与える必要がある。それと同時に世間にあふれる不適切なカナ振り教材を一掃することである。

第2ステップは不適切なカナに頼ることのない音声表記法の統一である。IPAが優れた表記法であるにもかかわらず現実に普及していないのはその難しさ、またはとっつきにくさに原因があるかもしれない。学習者に受け入れられにくいのならば、他に受け入れられやすく、統一性のある表記法を考える必要がある。島岡(1994)が考案している「島岡式カナ表記」は、カタカナは利用するが従来のようなローマ字読みでカナを振ったものではなく、音声学的な理論を基盤にかなり近い音を出す工夫をしている。個々の音だけでなく、音質変化や、語連結、リズム表記なども工夫され盛り込まれているので、そのまま読めばかなり英語らしい音になるようである。ひとつの可能性として推奨できると考える。

また、小学校から英語が始まろうとしている現在においては、フォニックスも有効な手段であろう。子供の耳からある程度の音声を入れておいて、その音のアルファベットや、アルファベットの組み合わせを示して行くやり方である。歌とともに表記を覚えていけるような教材が多いので、子供には受け入れられやすいであろう。但しフォニックスは表記法ではなく音を音として覚えていくやり方なので体系的に導入するのが効果的である。

さらに、ある程度音とスペリングの関係が習得できた後は、リズム、イントネーションなどのプロソディーを重視した指導法を行うことが効果的である。近年の研究や実験により、個々の音素の違いよりも全体のプロソディーのほうがコミュニケーション上では重要な要素であることが

検証されている (Clennel:1997, Dewing & Munro:1997, Pennington:1998)。すなわちプロソディーが正しければ、音素の間違ひがあっても理解できることが多いのである。

そしてそれらを指導できる教育者を育てることが必要になってくるのは言うまでもない。そのためには教師トレーニングを導入し、よりよい発音指導ができ、その重要性を認識している教師が教壇に立つことが望まれる。

おわりに

本論文は音声教育の重要性、必要性が現場や研究者の中で叫ばれながらもなかなか実現していない現状を憂慮して書かれた。音声教育が英語習得に与える重要度を多少でも浮き彫りにできたら幸いである。

今後は音声教育の必要性に対する認識が広がり、体系的な指導法が教育の現場に浸透していくことを望んでいる。特に小学校への外国語教育導入が目前に迫る現在、小学生時で始めることの意義が正しい音声の吸収であることが理解されねばならない。日本の英語教育システムの中で、そして社会環境の中で最も効果的に系統立って行くことのできる音声教育、そして日本人学習者にとって受け入れられやすい音声教育とは具体的にどのようなものであるかを考えることが、筆者にとっても、また英語教育界にとっても今後の早急な課題であろう。

<参考文献>

- ・アレン玉井光江 (1999). 音声教育からReadingへの橋渡し—Sound training for literacy development. *Irice Plaza* 第9号. 国際コミュニケーション研究所.
- ・Caravolas & Bruck (1993). The effect of oral and written language input on children's phonological awareness: A cross-linguistic study. *Journal of Experimental Child Psychology* 55.
- ・Clennel, C. (1997). Raising the pedagogic status of discourse intonation teaching. *ELT Journal*, 51, 117-125.
- ・Corder, S. Pit (1983). A role for the mother tongue. in Gass and Larry Selinker (eds.) (1983). *Language Transfer in Language Learning*. Newbury House Publishers.
- ・Dewing, T. M., & Munro, M. J. (1997). Accent, intelligibility, and comprehensibility: Evidence from four L1s. *Studies in Second Language Acquisition*, 19, 1-16.
- ・Durgunoglu, Nagy and Hancin-Bhatt (1993). Cross-language transfer of phonological awareness, *Journal of Educational Psychology*, vol. 85, No. 3, 453-465.
- ・Ellis R. (1985). *Understanding second language acquisition*. Oxford University Press.
- ・Jenkins, J. (1998). Which pronunciation norms and models for English as an international language? *ELT Journal*, 52, 119-126.
- ・加藤祥造 (1994) 「カタカナ英語の話」 南雲堂
- ・垣田直巳・松村幹男編 (1994) 「英語のリーディング」 大修館書店
- ・垣田直巳・吉田一衛編 (1988) 「英語のリスニング」 大修館書店

- 窪園晴夫 (1997) 西光義弘編「英語学概論」 くろしお出版
- 長谷川恵洋 (1997)「英会話と英語教育」 晃洋書房
- Major, R.C. (1999). Chronological and stylistic aspects of second language acquisition of consonant clusters. *Language Learning 49. supplement 1*, 123-150.
- Pennington, M.C. (1989). Teaching pronunciation from the top-down, *RELC Journal*, 20(1)
- 酒井邦秀 (1993)「どうして英語が使えない？」 筑摩書房
- 島岡丘 (1994)「中間言語の音声学—近似カナシステムの確立と活用」 小学館
- 竹蓋幸生 (1997)「英語教育の科学」 アルク
- 竹蓋幸生 (1984)「ヒアリングの行動科学」 研究社
- 田邊祐司 (1995)“コミュニケーションと日本人—もう一つの英語教育史”.
Irice Plaza 第5号 国際コミュニケーション研究所
- 玉崎孫治 (1987)“最近のLanguage Transfer 論”. 「言語習得と英語教育」 ELEC
- Toefl Test and Score Date Summary 1997-98 Edition. Educational Testing Service
- 吉田研作 (1989)「英語リスニング上達の方法」 The Japan Times
- 渡部和行 (1979)“「聞きとれない」とはどういうことか.” 英語教育27, 12, 2月号, 6-8.
大修館書店

<分析資料>

- 浅野博監修 1998 New Horizon 英和辞典第4版 東京書籍
- 河村重治編 1998 初級クラウン英和辞典第9版 三省堂
- 羽鳥博愛編 1999 ジュニアアンカー 英和辞典第3版 学習研究社
- サンライズ 中学1年学習参考書 1998 旺文社

(文教大学国際学部 非常勤講師)